

<特別企画>

翻訳教育「私の推薦図書」

翻訳研究育成プロジェクト有志編

欧米を中心に学術的体系化が進んだ Translation Studies(「翻訳学」「翻訳研究」「トランスレーション・スタディーズ」)の成果として、大学や大学院で翻訳を教育・研究するための基本文献はすでにいくつも存在する。入門書、リーダー、ハンドブック、エンサイクロペディアなど、教材に困ることは、まずない。そしてそこには、充実した文献案内も揃っている。だからここでは、敢えてそれらを繰り返さない。網羅的な文献の紹介は、別の機会に譲ろう。

彼岸の Translation Studies もよし、此岸の翻訳談義もよし、今回は、そんなコンセプトで翻訳研究育成プロジェクトの有志が気になる書籍を思いつくままに持ち寄りました。正統から異端まで、気ままなおしゃべりを添えてお届けします。

* * *

安西徹雄(1982)『翻訳英文法—訳し方のルール』バベル・プレス

安西徹雄(1983)『英語の発想—翻訳の現場から』講談社

安西徹雄(1994)『翻訳英文法徹底マスター』バベル・プレス

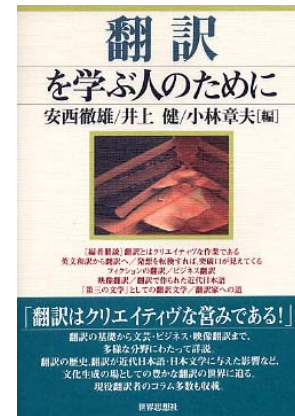
安西徹雄(2006)『翻訳英文法トレーニング・マニュアル』[2版] バベル・プレス

ひとつの翻訳技法を体系的に提示したもので、近時の(認知)言語類型論にも影響を与え、かつその成果を取り込んでいる。「日本語らしく訳すには具体的にどうすればよいか」という観点から英文法を再構成したこの「翻訳英文法」は、学校英文法が等閑視している文法の意味性や、英語と日本語の文法の違いへの気づきを促してくれるもので、英語教員が英文法を教える参考書としても大いに役に立つ。但し、翻訳技法としては、この体系はあくまでもひとつの指針であって、本書の技法を翻訳における言語規範として過度に強調すべきではなく、様々な翻訳ストラテジーのひとつとして相対化する必要がある。ボクが翻訳を考えるうえで大きな影響を受けたことは間違いなし。(河原清志)

安西徹雄・井上健・小林章夫(編)(2005)『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社

冒頭の编者による鼎談で、翻訳行為から翻訳の役割、欧米と日本における翻訳史に至るまで、Translation Studies に含まれるさまざまな分野を概観したあと、実践編では文芸・ビジネス・映像翻訳の方法を実例を挙げて説明する。柳父章の「翻訳で作られた近代日本語」、井上の翻訳文学論、雑誌『翻訳の世界』元編集長による「翻訳家のなり方」まで、至れり尽くせりの内容で、「翻訳」の全体像を浮かびあがらせている。「翻訳」と「翻訳学」のコンパクトな入門書ということか。(北代美和子)

初学者を翻訳にいざなう際の最良の本の一冊。本の帯に「翻訳はクリエイティブな営みである！」とあり、本書ではさまざまな分野の翻訳の楽しさが第一線の翻訳者・研究者によって記されている。さらに帯には「翻訳の基礎から文芸・ビジネス・映像翻訳まで、多様な分野にわたって詳説。翻訳の歴史、翻訳が近代日本語・日本文学に与えた影響など、文化生成の場としての豊かな翻訳の世界に迫る。現役翻訳者のコラム多数も収録」とある。執筆者は上記編著者のほか、柴田裕之、村田寛、田中武人、柳父章、今野哲男の諸氏。実務・研究・教育の三つ巴のバランスが非常によく取れた良書。(河原清志)



学生は翻訳について実はほとんどわかっていないらしい。「翻訳っておもしろそう」「翻訳家になりたい」と簡単に言うものの、具体的なことは考えていないようだ。本書はそんな学生たちに、英文和訳と翻訳の違い、日英語の発想の違いから、文芸翻訳と実務翻訳の違い、翻訳家になるための意識、さらには翻訳文学が近代日本に与えた影響まで、翻訳についての(翻訳の仕方の、ではなく)基礎知識をわかりやすい言葉で伝えてくれる。翻訳の訓練の前に、まずはこうした知識にも触れてほしい。加えて、本書は辞書を調べるとは何をすることか、にも触れている。ただ機械的に語義を調べるばかりの学生たちには、翻訳に取り組む前提として、そのこともぜひ知ってもらいたい。(佐藤美希)

安藤進(2003)『翻訳に役立つ Google の活用テクニック』丸善

翻訳をするのに、インターネット検索は不可欠である。本書は、翻訳者として知っておくと非常に有益な検索テクニックを解説してくれる。翻訳者の中には、自分で訳文のコーパスを構築して訳語決定に使う人もいるだろうが、本書はインターネット上の文章をコーパスに見立てて活用する方法を説明する。例えば、OR 検索やワイルドカード検索といった手法を使って、KWIC (Keyword in context) 検索を行うことができる。また、機械翻訳を利用した翻訳とその修正方法にも触れられている。実例と演習を織り交ぜながら説明されているので、学習者は実際に Google を使って確認しながら練習ができるのが良い。(山田優)

別宮貞徳(1996)『欠陥だらけの大学英語入試』マガジンハウス

当時予備校講師をやっていたボクにはこの毒舌は痛快だった。「入試とは 教授の頭 ためすもの」「生徒の足切りより先生の頭切り」「知らぬは出題者ばかりなり」などと題し、毎年の大学入試英語問題の選択肢のナンセンスぶりを分析。月刊『翻訳の世界』の連載「欠陥翻訳時評」の一部を単行本にまとめたもの。高校生を相手に英文解釈を正確に行ううえで選択肢の微妙な日本語の違いを検討し、英語力と日本語力を両方高めるといふ指導の指針となる記述が豊富にあり、翻訳の練習本としても高レベル。「大学というところは、先生がバカでも十分成り立つものですが、バカな先生に教わらねばならない学生は気の毒を絵にかいたよう」とは恐れ入る。(河原清志)

Bielsa, E. & Bassnett, S. (2009) *Translation in global news*. London: Routledge.

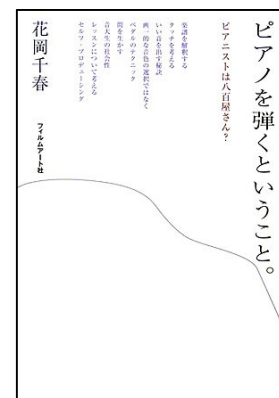
国際ニュースの流通とそこに関わる翻訳に関心を持つ人には、必読だろう。急速なグローバル化を背景として翻訳も拡大、多様化しているが、中でも主にマス・メディアに関わる国際報道の翻訳は、現代国際社会の課題でもある国際紛争や地域紛争の解決のための情報提供に大きな役割を担う。この情報流通に強い影響力をもつのが欧米の国際通信社である。そこでは、政治、権力、イデオロギー等様々な要因が複層的に絡み合うだけでなく、ジャーナリズムと翻訳の境が分からないほど両者が渾然一体となる。翻訳に関するこれまでの一般的な概念・枠組みを、根本から再考する契機を喚起してくれる格好の書とも言える。(坪井睦子)

芳賀徹 (2000)『翻訳と日本文化』 国際文化交流推進協会

日本は翻訳王国でありながら、翻訳という行為とメタ的に向き合うことをしてこなかった。政治、経済、哲学をはじめ文学まで、常に外国文化を積極的に取り入れ学んできた日本だが、それは常に「翻訳」を通してのことだった。翻訳文化の歴史を語り始めると、それは日本の文化そのものの歴史ともなる。翻訳の、トータルで見た文化の中での位置づけを考えさせられて楽しい。(野原佳代子)

花岡千春 (2007)『ピアノを弾くということ。—ピアニストは八百屋さん?』 フィルムアート社

ピアニストを目指す若者のための本だが、「ピアニスト」を「翻訳者」、「楽譜」を「原文」、「演奏」を「翻訳」と読み替えれば、翻訳(演奏)に対する心構え——「楽譜に書かれた情報を正しく読みとって再現する努力は、なにより大事です」——から始まって、「自らのレベルをあまり高く設定するのはよくないのですが、かといって手近な仕事で小銭を稼ぐことで、大事なチャンスや勉強の時間を空費してしまっていることはありがちです」という実際的なアドバイスに至るまで、ここに書かれていることのすべてが「翻訳」にもあてはまる。翻訳のテクニックでなく、翻訳者としてわきまえているべきことを、この本ほどわかりやすく丁寧に書いたものはないように思う。(北代美和子)



磯谷孝 (1980)『翻訳と文化の記号論—文化落差のコミュニケーション』 勁草書房

ロシア文学者による翻訳論集成。先駆的な仕事だが扱われた範囲はたいへん広い。翻訳に関する原理的な省察を含むだけでなく、作家としてはドストエフスキー、バルザック、ジョイス、思想家としてはラカン、ソシュール、さらにハイデガーまでもが翻訳の問題に合わせて論じられている。「翻訳研究」が知的冒険にもなることがわかる一冊。(三ツ木道夫)

板垣新平 (1980)『翻訳学』 信山社

80年代初め、本書は翻訳の実践的・理論的理解を深めるための学術分野としての「翻訳学」の設立を訴える。とくにニーズの多い産業翻訳において、まずはそれがどのようになされているのか規

範を調べる必要があるとする。たとえば法、特許、ビジネス、経理、広告、ジャーナリズムといった分野で、よい翻訳を測る基準は何か、ドライデンを参照しつつ9つの公準、また翻訳力を測る5つの公理を示す。かなり唐突に基準が組み立てられていくのだが、不思議と納得が行く。書きぶりの中に産業翻訳への愛情が感じられるからだろうか。(野原佳代子)

岩波書店編集部(編)(2006)『翻訳家の仕事』岩波書店

このエッセイ集に登場するのは、書かれた言語も時代も異なる多種多様な作品の翻訳に携わってきた当代指折りの翻訳家37名である。ここでは、ひとりひとりが自らの生を刻み込んだ言葉で、翻訳という営みを「翻訳」してみせる。彼らの口からほとぼしる言葉は、時に不協和音を響かせながら、原作の声にひたすら耳を澄まし、その声と対話を続けるという行為を通して深いところで共鳴し合う。それはさながら色とりどりの糸によって織りあがっていくひとつの作品を見るようでもある。作品のテーマは、「翻訳とは何か」。しかし、決して完成することのない作品である。翻訳という実践がある限り、この問いへのあくなき探求も続く。(坪井睦子)

亀井忠一(1994)『頭からの翻訳法』信山社

Mona Baker の言う textual equivalence に関する技法を扱った翻訳技術書。品詞転換や構文転換も扱っているが、あくまでも順送りの訳出を一貫して論じている。理論的には、(skopos 理論という機能主義的翻訳理論ではなく)テキスト言語学を基盤にした機能主義理論による訳出技法をまとめたものという位置づけ。本書は実務家による経験基盤から体系化したものであり、今後、言語学をベースに本書を検証し、体系を緻密化する楽しさが開かれている(例えば、情報の重要度、文の topicality と focality、線条構造的性、テキストの一貫性・結束性、新旧情報の流れ、主題一題述の進行、前景／背景の関係性などが論点として挙がる)。本書は実務翻訳を念頭に記しているようであり、分野別の議論も必要となろう。(河原清志)

川本皓嗣・井上健(編)(1997)『翻訳の方法』東京大学出版会

「これは英語を通じて翻訳を考え、翻訳を通じて英語を考える本です」(p. i) と冒頭にあるように、本書は優れた言語論であり、「翻訳の奥深さ」論でもある。翻訳に対して曖昧で表層的なイメージしか持たない学生の認識を広げてくれる。『翻訳を学ぶ人のために』がわかりやすい入門書だとすれば、本書は初級～中級レベル。I章II章で解説される文法や訳読の必要性や辞書の活用法などは、語学を勉強する(そして翻訳につなげる)には絶対に知っておいてもらいたい。IV章「文化の翻訳」は、翻訳という言葉を読するという行為にばかり着目しがちな学生に、翻訳が持つ多様な側面を伝えてくれる論文集になっている。(佐藤美希)

多くの論者が自身の視点から翻訳について「自由」に書いている。「自由に」というのは、いわゆる「西洋」(イスラエルは西洋か?)で展開している翻訳理論に囚われないで、独自の視角を提示しているということである。もし日本独自の翻訳理論を構築するのであれば、西洋流の翻訳理論から自らを解放し、日本固有の論点を発掘するのも一案だろう。本書は「英文解釈から翻訳へ！」と帯に謳った実践の書であることから、地に足の着いた日本発の翻訳(理)論のあるべき姿を提供し

ているようにボクには読める。流行りの英語教育に踊らされず、従来の大学入試英語に真面目に取り組んでから翻訳に臨もうとする見識ある学生には、もってこいの一冊。また流行りの翻訳理論に踊らされず、日本の土壌に根差した論構築をするうえでも役に立つ。(河原清志)

河野一郎(1975)『翻訳上達法』講談社

河野一郎(1999)『翻訳のおきて』DHC

標語的な翻訳論が魅力。前者では「欠陥翻訳の見分け方・五つのカギ」「翻訳の技法・五つのコツ」などの章立てがある。「訳者は役者」「翻訳業は、しがない家内工業」といった小項目もあり茶目っ気たっぷりの文章はさらさらと軽快に読める。後者は<10のおきて>を扱う。「第4のおきて：畳の上で死ぬな」では直訳か意識かを論じている。『「カラスの濡れ羽色の黒髪」よりも『つややかな黒髪』、『乳母日傘で蝶よ花よと育てられた深窓の令嬢』よりも『とても大切に育てられた良家の娘』[...]と、気ばらずに訳すほうがけっく作品全体が引き立ちます」と言う。「ボヴァリー夫人が『最後はやっぱり畳の上で死にたいわ』と言ったのでは『目を白黒』させられます」と。異化／馴化の議論もこういう生きた実例をベースに論じると面白い。(河原清志)

コスミック英会話編集室(2008)『名作映画で英会話 レベッカ』コスミック出版

残念ながら、この書名からはある種の偏見が誘発されてしまう。だが、それは一切無視して、英会話上達については不問とする。本書の真骨頂は、「通常字幕」「全訳字幕」「英語字幕」「字幕なし」の4パターンから選択して視聴できる点だ。前者2つ「通常字幕」「全訳字幕」を比較すると、初学者が字幕翻訳について考える際に意外と参考になる。DVD 付のシリーズには他にも、『カサブランカ』『ピーターパン』『ローマの休日』『シンデレラ』『若草物語』『そして誰もいなくなった』『風と共に去りぬ』などがある。(長沼美香子)

前田尚作(2006)『日本文学英訳分析セミナー』昭和堂

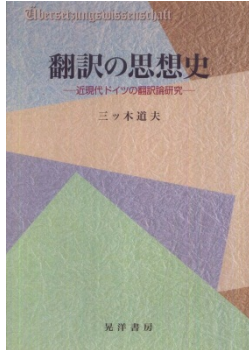
副題は「なぜこのように訳したのか」。本書は解説編と問題編の二部構成で、「原文(日本語)の解釈」と「訳文(英語)の作成」という順序でまとめられている。英訳の技法として、情報構造、順行訳、焦点の差し替え、名詞表現の言い換えなど、テキスト構成に配慮した視点が参考になる。題材は、芥川龍之介、川端康成、桐野夏生、宮部みゆき、村上春樹、村上龍、夏目漱石、島崎藤村、谷崎純一郎、吉本ばなな、柳美里とその英訳。(長沼美香子)

マンデイ, J.(2009)『翻訳学入門』みすず書房 [Munday, J. (2008) *Introducing translation studies* (2nd ed.). London: Routledge.]

取り上げるまでもない翻訳学の入門書であるが、翻訳教育の基本書として教室で用いる際に、各章最後に付された「討論と研究のために」が活用できることを強調しておきたい。翻訳について研究し始めたばかりの学生にとって、各章に取り上げられる翻訳理論を自身の問題意識や身近な例と結びつけることは、理解を深める大きな助けとなるはずだ。たとえば各自の好きな日本語翻訳作品を用い、結束性や一貫性の明示化を探したり(p. 16, 5 点目)、翻訳の「可視性」について考察すること(p. 261, 3 点目)などを通し、理論がきちんと頭に入り、また分析の手法も学ぶことがで

きるだろう。(斉藤美野)

三ツ木道夫(2011)『翻訳の思想史—近現代ドイツの翻訳論研究』晃洋書房



「ドイツ語」「ドイツ文学」「ドイツ研究」の専門家でなくとも、「ドイツ」と翻訳の問題を歴史的に捉える本書は魅惑的だ。同著者の『思想としての翻訳—ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』(白水社, 2008)では、本邦初訳の数編に感動した記憶も新しい。どちらも翻訳への知的好奇心を満たしてくれる。さらに近代日本も視座に入れて、翻訳の根源的なあり方を考えてもよい。多和田葉子のエッセイ『エクソフォニー』とあわせて読んでも、相性はきっといい(と思う)。(長沼美香子)

宮平知博・渡辺日出雄・田添英一・神山淑朗・武田浩一(2000)『インターネット機械翻訳の世界』毎日コミュニケーションズ

翻訳者と機械翻訳は、なぜか相性が悪い。しかし翻訳実務者と教育者が、機械翻訳について最低限の知識を持っておくことは悪いことではないだろう。そういう観点からは、本書は十分すぎるほどの情報を提供してくれる。内容は、技術論が中心だが、機械翻訳の歴史、種類、しくみ、実際、未来を網羅する。特に Chapter 2 の「機械翻訳のしくみ」では、主要な機械翻訳の仕組みが丁寧に説明されている。また機械翻訳だけでなく、コーパスの活用法の説明があるのも嬉しい。実際に使えるツールの紹介もある。(山田優)

村上春樹・柴田元幸(2003)『翻訳夜話 2 サリンジャー戦記』文藝春秋

言わずと知れた、『キャッチャー・イン・ザ・ライ』新訳をめぐる対話。文学作品の言葉や文章をどのように翻訳するかということに、翻訳者の作品解釈や意思、文学観、こだわり、そして時には偏愛、深読み等々がどれだけ込められているか、その果てしなさが具体的に示されている例だと思う。ゼミで野崎訳と村上訳を比較した後この対話を読んだ際、学生はこう嘆息した。「こんなことまで考えて訳しているの?」「こういう解釈もありなんだ」「こんなの思いつきもしなかった」。「文学」と「翻訳」の果てしなさに触れてもらい、翻訳文学を読むことの面白さに気づいてもらえる本だろう。(佐藤美希)

中原道喜(2010)『誤訳の典型』聖文新社

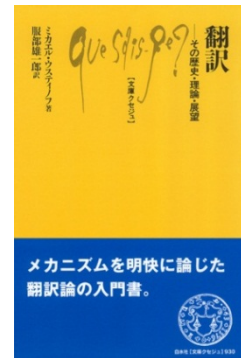
同著者が2003年に出した『誤訳の構造』の姉妹書。どちらも翻訳以前の問題、つまり正確な英文読解に有用な内容だ。とはいえ、大学での翻訳の授業はいつの間にか、英文解釈の授業になることも多々あるわけだから、このアプローチはかなり実用的。類書というわけでもないが、越前敏弥『日本人なら必ず誤訳する英文』(ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2009)よりも、書名は地味だが内容は刺激的だった。(長沼美香子)

中村保男(1982)『翻訳の秘訣—理論と実践』新潮社

「理論と実践」というサブタイトルのとおり、翻訳理論の基本ルールの体系と、それを総合するための翻訳実践論とが相互補完的に記された本。あとがきに「いくら方法論化・体系化をめざそうと、生き物である言葉を扱う翻訳に完全なシステムはありえない。それが現実である以上、本書の理論篇で試みた体系化はあくまでも部分的かつ試験的なものであり、そういうものとしてその理論篇を自分なりの翻訳術を研ぎすますための参考という程度に受けとっていただいたほうが筆者としては安心できる」「言語表現というものは、それほどゲシュタルト的なのであって、ひとつの要素だけを抽出するのは危険なのだ」とあり、理論化・体系化の限界も見据えた筆者の見識が大いに評価される。(河原清志)

ウスティノフ, M. (2008)『翻訳—その歴史・理論・展望』白水社 [Oustinoff, M. (2007) *La traduction* (Collection Que sais-je? No. 3688). Paris: Presses Universitaires de France.]

訳者「あとがき」にあるように、本書を一言で表すなら「翻訳論の概説書」(p. 143)である。ここで言う翻訳論とは、1970年代後半に確立した独立した学問を指す。近代西洋の知の延長上に生まれ発展してきたこの学問の全体像を、非西欧圏の人々が体系的に理解するのはなかなかの至難である。日本語で書かれた本格的な概説書がない中で、本書の意味はまさにそこにある。しかしそれだけではない。目次を見れば、この薄い文庫に託した著者のメッセージが伝わってくる。第1章「言語の多様性、翻訳の普遍性」、第2章「翻訳の歴史」、第3章「翻訳の理論」、第4章「翻訳の作用」、第5章「翻訳と通訳」、第6章「翻訳の記号」。明快である。(坪井睦子)



柴田元幸(2006)『翻訳教室』新書館

東京大学教授・翻訳家の柴田元幸が東大文学部でおこなった「翻訳演習」の授業を文字化したもの。授業は、学生が課題の訳文を提出→教師が添削→学生に返却→学生の訳文から選んだ訳例を提示→授業参加者全員+教師で討論という形で進められる。課題が小説に限定されているために、原文の細かいニュアンスを読みとり、日本語で再現していく過程を詳細に追うことができる。翻訳マニュアル本からのステップアップ向き。また授業の組み立て方、課題の選び方など、教える側としても参考になるところが多い。(北代美和子)

藤本一勇(2009)『ヒューマニティーズ 外国語学』岩波書店

タイトルのせいで誤解される恐れがあるが、本書は外国語学習の理論やノウハウの本ではなく、「言語(国語や外国語)が持つ根本的な権力性と倫理性というヤヌスの双貌をどう捉えるか」を中心に論じている。「外国語と権力」、「言語というシステムを外部から見る」、「翻訳の倫理学」、「異質な言語たちの未来」、「「来たるべき言語」たちのために何を読むべきか」の5章で構成されており、VenutiやBenjaminへの言及もある。最終章は文献案内になっており、言語や翻訳の哲学的研究を志向する人には便利だろう。(水野 的)

鈴木直(2007)『輸入学問の功罪—この翻訳わかりますか?』筑摩書房

自由主義経済の成熟した社会では、商品の質と価値は市場での競争によって鍛えられる。ところが、この市場原理から隔離されてきた分野がある。日本の近代化に大きな役割を果たした輸入学問の翻訳、中でも社会科学、哲学、思想書の翻訳である。問題なのは、個々の翻訳の質ではなく、翻訳のスタイル、即ちこの学問領域で金科玉条のごとく守られてきた「原文との一語一語対応」「逐語訳」であり、それを支えてきたのが教養主義だと著者は言う。この市場から乖離したアカデミズムに鋭い批判を向けてきたのが、翻訳を読者によって受容されるべき商品と見なす商業ジャーナリズムである。議論の今後の行方が、翻訳と社会的制度を考察する上でも興味深い。(坪井睦子)

田辺希久子・光藤京子(2007)『Practical Skills for Better Translation: 英日日英翻訳実践トレーニング』マクミランランゲージハウス

大学での翻訳の授業用教科書として使いやすい。翻訳の授業と言っても高度な実践的訓練まではいかず、英文和訳とは違う翻訳の一端を理解してもらうこと、翻訳の面白さに触れてもらうことを目的とする授業の場合、この教科書は特に効果的ではないかと思う。学生が自分の取り組むべき課題やポイントを理解しやすい構成であるため、それにもとづいて学生主体の様々な活動が可能だ。個人で取り組むだけではなく、ペアやグループでの翻訳、ピア・レビューのように互いに訳を論評し合うといった教室活動を通じて、学生のレベルに応じて翻訳の奥深さに触れられると思う。学生が興味を持ちそうな様々なジャンルを扱っているのも魅力的。(佐藤美希)

田辺希久子・光藤京子(2008)『英日・日英—プロが教える基礎からの翻訳スキル』三修社

入門編で英日・日英翻訳全般を概括。基礎編では著者たちの実践・教育経験、および翻訳関連(品詞転換/順送りの訳、結束性)や言語学関連等の先行文献を踏まえて、細かい翻訳スキルを説明する。実践編では具体的なテキストを使用して、基礎編で学んだスキルを実際に活用してみる。英日翻訳では社会・政治・経済・文化など多方面にわたる新聞雑誌の記事など、日英翻訳ではEメールや招待状、論文アブストラクト等々、主として実用的なテキストが選ばれており、実務翻訳を目指す学生向き。実践編のテキストはレベルが高く、かなり難度の高いものも含まれる。(北代美和子)

翻訳のコツというものを体系化するのは難しい。プロの実務翻訳者が何気なく行なっていることでも、翻訳の学習者・大学生にとっては、全く未知の世界だからだ。本書は、産業翻訳者にとって必要な翻訳スキルを解説し、学習者が練習できるように構成されている。レベルも入門編、基礎編、実践編に分けられている。扱われるジャンルも時事的なものからビジネス系まで多岐に渡る。ただし、(英文の)内容のレベルが若干高めに設定されているので、学部の授業で使用する場合は、3年次以上が対象となるだろう。練習問題の分量も多いので、通年での使用をお薦めする。プロ翻訳者に求められる基本的な「スキル・セット」のひとつの指針的な書として利用できる。(山田優)

田原利継(2001)『英日実務翻訳の方法』大修館書店

体系化志向の翻訳指南書のなかで本書は特異な特長がある。あくまでも実務翻訳に絞ってはいるが、「適語・正語を見つける」「概念訳と説明訳を使い分ける」「正順訳を適用する」というオリジナルの用語を提唱し、定義づけをしたうえで実務に根差した説明を展開している点だ。理論的には品詞転換論であったり機能主義的翻訳理論であったりするが、各種翻訳技法の適用場面を実務の立場から明確に示してある点が実務家ならではの、有り難い。「文章の流れをつくる」「文体を適正化する」「現代日本語表記法を知る」の章では見落とされがちな翻訳文体論などを扱っている。テキストタイプ論や skopos 理論を援用できる場面ではあろうが、実務感覚に根差した本書の趣旨を理論的に緻密化する作業は、今後理論サイドで大いに期待が持てる。(河原清志)

辻由美(1995)『世界の翻訳家たち：異文化接触の最前線を語る』新評論

同じ著者による『翻訳史のプロムナード』(みすず書房, 1993)に続く本書は、前著のために翻訳の歴史を辿る過程で、著者の中に湧きあがってきた「翻訳家の人間像」への関心から生まれた。日本国内では、これまで多くの翻訳家たちが、自らの翻訳実践や翻訳論について綴ってきた。しかし、他の国々で活躍する人々の生の声は、ほとんど紹介されることはなかった。著者自らのインタビューを通して、様々な背景を持つ世界の翻訳家たちの翻訳への思いが語られる。個々の実践は異なっても、ふたつの言語と文化の狭間に敢えて身を置き、「翻訳するのは、深く理解するため」という彼らの声に、翻訳という実践の個別性と普遍性が凝縮されている。(坪井睦子)

Williams, J. & Chesterman, A. (2002) *The map: A beginner's guide to doing research in translation studies*. Manchester and Northampton: St. Jerome.

トランスレーション・スタディーズ(TS)を学ぶ大学院生はもちろん、修士論文は書かないまでも大学院レベルの授業で翻訳について学ぶ機会のある語学系・文学系の院生に薦めたい。何より、語学・文学系の研究方法が明快に示されているのが良い。その好例として TS が使われているのが、また良い。TS が扱う領域の多様性が日本のこれまでの翻訳論を拡大してくれることがわかるのも、さらに良い。TS の概観と語学・文学系の研究方法の両方を一冊で網羅できる良書。(佐藤美希)

八木克正他(編)(2004)『ユースプログレッシブ英和辞典』[初版第一刷]小学館

学生にとって、辞書に掲載されている複数の意味・訳語から、もっとも適切な訳語を選び出すのは簡単な作業ではない。この辞書では、「訳語ナビ」(重要な多義語について、主要語義が一覧・検索できる。原義からの意味の説明)、「文型表示」(文型による意味の差異を解説)などによって、訳語の選択を助ける工夫がされている。「類語ノート」では、たとえば pile、stack、heap の違いが明確に説明され、細かいニュアンスの差異を読みとるのに役立つ。用例の日本語訳もセンスがよく、学生が翻訳をするさいの適切なヒントとなりうる。(北代美和子)

柳父章(1979)『比較日本語論』日本翻訳家養成センター

この有名な書は、翻訳だけでなく日本語日本文化の特徴を多角的に論じているのだが、とくに興

味深いのは、翻訳に対する日本人の一般的な姿勢に言及している部分である(p. 221)。翻訳はその文体のために、読んだとたんに翻訳とわかる。しかし訳す側は一般的に、原文に近い訳文が理解しにくいものであるとき、それは原文のレベルが読み手の能力を超えているからだと考えがちである。読みやすくするという行為は、便宜上のことであってそれ以上のものではない。(野原佳代子)

柳父章(1983)『現代日本語の発見』大和書房

本書は、明治期の日本において「直訳」とは「漢文訓読式の一語一語を当てはめて、次にひっくり返すという方法」を指したことや、その「直訳」は「そのままでは翻訳にならなかった」こと、そしてそれが「新しい、カッコイイことば使い」(pp. 40-41)と信じられたという点などから日本における翻訳文体がどのようなものであり、どのようにして形作られたかを教えてくれる。伝統的な表現とは異なる「直訳」が、明治の読者、書き手を魅了するものであったことは、翻訳の役割を考える上で、欠かせない論点であろう。翻訳文体や翻訳語、翻訳作品の未知性や異質性をもつ魅力や働きについて論じる際には、著者の主張をぜひ押さえておきたい。(斉藤美野)

柳父章(2002)『日本語をどう書くか』法政大学出版局

教室で翻訳はしてみたものの、できあがった文章は、「こと」「彼・彼女」のオンパレード、「である」の繰り返し、「……の……の……の……」のような格助詞の連続、無意味な読点など、翻訳文独特の悪文になりがち。本書では、西欧語を「翻訳」するための日本語が「作られてきた」過程を土台にして、「日本語の書き方」を考察する。実は「翻訳」をするために「作られてきた」部分にこそ、訳文を悪文にする要因があることが多い。本書は隠されていた悪文の要因を明らかにして、学生に「翻訳文体」の特徴に目を向けさせ、日本語をより自覚的に書くよう促すきっかけとなる。(北代美和子)

柳父章・水野的・長沼美香子(編)(2010)『日本の翻訳論—アンソロジーと解題』

法政大学出版局



1961年に編まれた翻訳論アンソロジー、河盛好蔵編『翻訳文学』(角川書店)と比べると、「翻訳研究」の進捗がはっきりわかる一冊。日本の近代化が始まった直後(明治6年)から第二次世界大戦末期(昭和19年)までの翻訳論が時間軸に沿って展望できる。類書がないため貴重な歴史資料となっている。(三ツ木道夫)

大学・大学院における翻訳教育では、翻訳実践と並行して、〈翻訳〉について考え、議論し、レポート・論文を書くための教材が必要となる。翻訳教育を単に「語学」の問題系に矮小化しないための一冊。(長沼美香子)

温故知新とはまさにこの本のこと。解題は、原典著者と時代背景の解説を背景に、当時の翻訳論

の展開を論者ごとに異なった視点で捉えている。ユニークなのは翻訳という言葉接触・変容による漢文脈・欧文脈・和文脈の軽重の変遷とその背後にある考え方(言文一致運動など)を原典から具体的に追えることだ。一部の論者を除いて、解題は詰まるところ(多元システム論とそれに基づく)規範論(翻訳規範と言語・文体規範)及び異質化／同化(ないし直訳／意識、起点重視／目標重視)を扱っている。西洋流(?)翻訳理論とは異なる理論装置の自己醸成を望むとともに、「本アンソロジーを読むために」を敷衍した、一貫した通史的解説が今後大いに期待される。(河原清志)

山岡洋一(2001)『翻訳とは何か—職業としての翻訳』 日外アソシエーツ

職業として翻訳を実践することの気概と誇りを感じさせる本。「翻訳は古代から現代まで世界各地で活発に進められてきたが、翻訳が批評や論評、研究の対象になることはあまりない。本格的な翻訳論は数えるほどしかない」と云い、日本の土壌で翻訳を学問として真剣に議論しようとしていた稀有な翻訳家。「明日の日本文化を支える基盤を築く一助になるのが翻訳なのだ」と云い、文化としての翻訳について後進の者に夢と希望を語りながら古典翻訳に全力投球していた翻訳家。翻訳についてボクは山岡さんともっともっと語りたかった。「すべての学問は翻訳からおのおの子を授かったのだ」というジョルダン・ブルーノの言葉を捧げたい。(河原清志)

山岡洋一(2002)『英単語のあぶない常識—翻訳名人は訳語をこう決める』 筑摩書房



include を「含む」と訳してはいけない——これにはかなり衝撃を受けた。他にも、「improve ≠ 改善する」「often ≠ しばしば」「define ≠ 定義する」「expect ≠ 期待する」「in fact ≠ 実際」「periodical ≠ 定期的に」「traditional ≠ 伝統的に」など、われわれの訳語に対する常識を脱構築してくれる。闘った翻訳家「山岡洋一」の矜持を感じさせる圧倒的な読後感。著者曰く「どんな語句でも、訳語との間にかならず違いがあり、ずれがある。違いやずれがあるから、言葉はおもしろい」と。(長沼美香子)

